

平成27年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校 学校評価総括表

「評価」及び「総合評価の評定」の基準

A：十分達成できた

B：概ね達成できた

C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成</p> <p>一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>		<p>総合評価 B</p>		<p>(所見) 学生の進路獲得に向け、進路ガイダンスや面接指導等に全職員で取り組んだ。卒業生の90%が進路を決定し、うち2名が4年制大学農学部へと編入した。 確かな学力育成のために、昨年度より授業評価を試行導入し、授業改善に取り組んでいる。知識・技術の活用に関して、マンツーマン指導の充実等により、学生のデータ分析能力、情報活用能力、プレゼンテーション能力が向上した。 社会性の醸成に関しては、実習、模擬会社の活動、自治会行事等において、80%の学生が「自己の責任や役割を果たした」と自己評価をした。また、企画やファシリテート能力に長ける多くのリーダーを育てることもできた。 資格取得に関しては、本年度、全国で初めて農大として「食プロ」育成プログラムの認証を受け、2年次生の13名が同プログラムを修了した。 課題としては、学校評価に係る学生アンケートと教職員アンケートの肯定的評価に値の開きがあり、今後はその開きを縮めるよう取り組む必要がある。 以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>			
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
① キャリアプランニング(将来設計)能力の育成	1 進路希望調査、三者面談、進路相談会等を実施し、一年次生のうちから学生に早期の進路決定意識を醸成させ、進路決定を支援する。	個人面談を年間3回以上実施し、1年次9月の進路目標決定者を90%以上にする。	1年次生・2年次生に対する三者面談を5月と6月にそれぞれ1回実施した。また、コース選択、プロジェクト学習、農業体験学習、その他学生のニーズに応じて個人面談を1人あたり3回以上実施した。 面談に対する2年次生の肯定的評価は73%であった。	B	B	就農すると所得の保障がない。その手立てとして、まずは農業が魅力ある産業にならないといけない。 生活を安定させるためには、大規模化や六次化という方策がある。 新商品の開発と管理については、費用対効果を慎重に考慮しないと経営的に難しい。	「農大に入学してよかった」と解答した学生は、2年次生67%に対し、1年次生は75%と多い。また、三者面談に対する2年次生の肯定的評価も67%と低い。この傾向は2年次生が1年次生の時から同じであり、個性・能力に応じたより一層丁寧な指導が必要であると考えます。
	2 公共職業安定所や人材育成会社と連携したキャリア教育を推進する。	1年次後期から2年次前期にかけ、公共職業安定所と連携した進路ガイダンスを2回以上実施する。2年次では人材育成会社によるキャリア教育を2回以上実施する。	公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを、1年次後期と2年次前期に2回実施した。2年次では「キャリア形成」の授業を4回実施した。就職ガイダンスと「キャリア形成」の授業に対する2年次生の肯定的評価は43%であった。				A
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1 学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。	昨年度より「授業評価」を試行的に導入しており、評価を行った41科目中37科目で良好な評価を得た。また、80%の学生が、「教師は授業改善に努めている」と回答している。「講義や演習で、基礎・基本的な知識・技術からていねいに教えてくれた」と回答した学生は90%であった。 講義で行われる教養科目・専門科目のうち、不認定者が10%以上となった科目数は、1年次生が19科目のうち3科目、2年次生が16科目のうち1科目となった。	B	B	学生の授業評価では、わかりやすい要約資料や、スライドを活用する等の授業の評価が高かった。 一方、予習や復習を行っていない者が約6割いた。 授業中の居眠りやスマートフォンをいじる者、授業とは別のことをする者も散見され、学習への姿勢に関しては課題がある学生もいた。 次年度もわかりやすい授業を心がけ、授業改善に取り組むほか、授業に集中させるため、宿題やレポートの課題を取り入れ成績評価にも反映させる等に取り組む。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題	
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実(続き)	2	進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	学生アンケートを実施し、「進学対応カリキュラム」と「個別指導」の有意義性に対する肯定的評価を80%以上にする。	編入学希望者には1年次より、英文読解、時事問題小論文、口頭試問等の個別指導を継続的に行った。本科生3名が大学への編入学試験を受験し、2名が農業系学部合格した。また、2年次生の就職指導に対する肯定的評価は67%であった。	B		志望校の農業系学部については編入学試験過去問題を分析し、出題傾向に基づいた入試対策を実施した。今後も、学生の能力・適性・希望を確実に見極め、志望者動向も踏まえた受験戦略を立てることが必要だと考える。	
	3	就職希望者には、就職セミナーやガイダンス等の実施により、早期から就職活動意欲の醸成を図る。 また、1年次より就職補習を定期的実施し、基礎学力の向上を図ると共に、履歴書やエントリーシート等の作成を支援する。	就職セミナー、ガイダンス等を年間2回以上実施する。 2年次生を対象に、「履歴書の書き方講座」、「面接対策講座」を開催する。 就職補習に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。	就職セミナー、ガイダンス等を公共職業安定所と連携して2回実施すると共に、その前後で、履歴書の書き方や面接対策に関する補習を実施した。進路指導担当者と卒論担当者が、個々の学生の履歴書を添削し、試験前には模擬面接を行った。また、1年次後期より、数学と国語の基礎学力を向上させる補習を実施した。2年次生の73%が、「補習授業や個別指導が学力向上や進路実現に役立った」と回答している。	B		履歴書の書き方や面接対策についての補習では、基礎から説明した。今後は、就職試験に関するレジュメを配布し、具体的な説明・指導を必要とする学生を対象に補習を実施する必要がある。	
	4	学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、家畜人工授精師等に係る特別講座を4種類以上開催する。合計の受験者数を30人以上にし、合格率を70%以上にする。	「自分の進路や希望に応じて、資格取得特別講座を受講し、資格試験にチャレンジした」と回答した学生は64%であり、前年度より14ポイント減少した。各資格検定の合格者と受験者は次のとおりである。 ・造園技能検定(0名/5名) ・危険物取扱者試験(1名/15名) ・大型特殊免許(8名/13名) ・大型特殊けん引免許(11名/16名) ・毒物劇物取扱者試験(0名/4名) ・家畜人工授精師(1名/1名) ・家畜商(1名/1名) 合計(22名/52名)合格率42% また、授業の単位取得により得られる資格として、卒業生31名中、21名が農産加工マイスターを取得し、13名が食プロのプログラムを修了した。	C	B		合格率は前年度の79%から37ポイント減少した。 資格取得チャレンジにあたっては、漫然と勉強したのでは合格はおぼつかないこと、体力が必要なものについては最後までやり抜く気力をもつこと等をおりにふれ伝えたい。 今後とも特別講義の改善と演習の充実を図る。
	5	2年次生一人ひとりの進学・就職活動に向けて、面接・マナー・口頭試問等の個別指導を実施する。	面接・マナー・口頭試問の指導を充実するため、受験レポートを分析、作成した。 「就職試験受験報告書」、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」の改訂を行い個別指導に活用する。 年度末の進路決定率を90%以上にする。	「就職試験受験報告書」、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」を改訂し、2年次生への個別指導(履歴書の添削・模擬面接等)で活用した。新たに「履歴書・エントリーシート文例集」を作成し、就職補習で活用した。上記教材に対する2年次生の肯定的評価は67%であった。3月末現在の2年次生の進路決定率は、90%であった。 編入学試験に関しても、四年制大学農業系学部の出題傾向を分析し、小論文や口頭試問対策に繋がる参考資料を進学希望者に提示することができた。	A		学生が、希望に応じた多様な進路に進むことができていく。さらなる指導の充実を期待する。	学生に対する就職支援において、「個別指導の充実」という課題は達成できた。しかしながら、来年度は就職活動時期が前倒しとなることから、早期に就職活動に取り組む態度を醸成する必要がある。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 実習や模擬会社の運営において、スマートフォンやタブレット等の情報端末の活用を推進する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を90%以上にする。	「情報処理Ⅰ」、「情報処理Ⅱ」の授業を通じてワード、エクセル、パワーポイントについて活用できる能力を育成した。プロジェクト発表や模擬会社の発表において、全ての学生がパワーポイントを使用してプレゼンテーションを行った。2年次生の93%が、Microsoft Officeの基本的な使い方を習得できたと回答している。 模擬会社そらそらじやのfacebookに関しても、学生が主体となり、年間を通じて活動状況を発信することができた。	A	A	I C Tの活用ができる人材育成が必要である。I C Tを用いて情報発信をしたり、I C Tを用いて人間関係を構築できる人材を、さらに育成してほしい。	facebookに写真や情報をアップロードする者が固定されていることから、人材育成の観点からも、より多くの学生が携わるようにする必要がある。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 学校行事として各種プレゼンテーションの機会を3回以上設定する。	プロジェクト学習の①計画発表、②中間発表、③成果発表、ならびに、④農業体験学習報告会を学校行事として設定し、プレゼンテーション能力を育成した。 学生の報告書や発表用スライドの作成においては、担当教員もコンピュータ室に出向き、指導・助言を行った。2年次生の97%が、「卒業論文作成において先生が個別指導をしてくれた」と回答している。 本校HPに、過去の主なプロジェクト研究をアップロードし、地域への積極的な情報発信を行った。	A		観察による相対的な評価であるが、ここ数年で学生のプレゼンテーション能力は確実に向上している。優秀な研究に関しては、外部へもさらに積極的に発信することが必要だと考える。 次年度も、農業高校や関係機関と連携し、お互いにプロジェクト活動を発表し合う等の学び合う機会を設ける必要がある。	
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース演習の30%以上を、話し合い、討論、ワークショップ等の言語活動に充てる。	学校行事として、「ブレインストーミング・KJ法研修」を、外部講師を招き、2日間に渡り実施した。	C		コース演習で、商品開発や校外研修の振り返りのためにKJ法を活用したり、農大祭その他の自治会行事の反省会でもワークショップを行いなどの機会が昨年より少なかった。それらの手法を教える機会を増やす必要がある。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題	
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 「学生プロジェクト学習・実習とそらそうじゃの業務や商品開発等を一体とみなした各業務担当ごとの実践的な運用手法を策定し、組織的に指導助言できる体制をつくる。	業務担当単位で活動する時間を月1回以上確保する。策定する運用手法に対する学生・職員の肯定的評価を80%以上とする。	各担当毎の運用手法の基本にそって各担当単位の活動と支援体制が整い、計画している活動や当面する課題について話し合った。実践的な運用手法については、検討中であり、運用手法自体へのアンケートは未実施である。	B	B	農業を始めると、作物の栽培力を高め、よい作物を作ることがまず必要である。次に大事なのは販路である。従来の販路以外に、直売で売り切っている物もあるが、ネットの販売も考えなければならぬ。そらそうじゃも、ネット販売について考えてみるのはどうだろうか。	会社活動のについて話し合う時間を持つことより、各担当の役割や課題、実施すべきことへの理解度が向上し、学生間の連携も深まったことから、次年度も引き続き、時間を確保し、多くのリーダーが育つよう、本年度同様に教職員も担当者会議に出席し、そらそうじゃの活動を支援していく必要がある。	
	2 模擬会社「そらそうじゃ」の運営や活動を通して、責任、自他の敬愛や協力を重んじる態度や社会性を農業大の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、模擬会社活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。	全学生の肯定的評価は63.4%となった。うち2年次生は66.7%であったが、1年次生は60%にとどまった。	C			実習やプロジェクト活動と模擬会社の活動に関して、学生が定期的に自己評価ができる仕組みをつくり、各コースで継続的な指導をする必要がある。	
	3 「そらそうじゃ」の活動ならびに「きのべ市」の開催に関する広報活動を積極的に、「ファンクラブ」の会員、「きのべ市」への来場者を増やす。	そらそうじゃHPを立ち上げ、学生の活動状況や成果を月毎に情報提供する。	そらそうじゃのHPを通して、学生の活動状況を情報発信するとともに、きのべ市の開催予定やファンクラブの募集などを情報提供するなど、広報活動を行った。	B			ホームページに関しては継続的な更新が必要になるので、新商品の紹介、野菜の機能性、栽培日記等のコンテンツを学生が主体となって作成できるよう業務担当者会議で検討し取り組む必要がある。	
	4 学生の研究課題や進路に対応した校外での「農業体験学習」を実施し、研修先での職業体験を通じて、実践力や人間関係能力を育成する。	学生が積極的に農業体験学習に参加し、知識や技術等の実践力を身につけたかを調査する。それらの肯定的評価を90%以上にする。	2年次生全員が、4回(20日以上)の農業体験学習に参加し、報告書の提出状況も良好であった。事後アンケート結果より、全学生が積極的に農業体験学習に参加したことが捉えられた。また、97%の学生が「農業体験学習を通じて、知識や技術面で成長することができた」と自己評価している。受入関係者の評価も平均で10段階中8.35と高かった。	A			農業体験学習で農家へ行くと、機械化がますます進んでいるのが分かんと思う。ほんの少しのアイデアで機械化ができる場合が多々ある。学生の部活動のような活動で機械化の開発をやってほしい。	職員もすべての受け入れ農家を4回以上訪問し研修先との情報交換を行った。多少のクレームや心配事もあったが、学生と十分に協議しその後の研修態度の改善に繋がった。今後も、受け入れ先との連携を密にして指導を行う必要がある。
	5 「農業体験学習」に係る報告書作成や成果発表会等の活動を通じて、学生の気づき、発見、成果と課題等を共有させる。	事前・事後の指導を徹底すると共に、報告書作成に係る個別指導をしっかりと行い、成果発表会の不合格者数を0にする。	報告書作成に関しては、プロジェクト学習同様、担当教員が学生を十分に指導し発表会に繋がった。全ての発表者が事前に告知した発表ルール(発表時間、態度、質問への対応など)を守り、概ねレベルの高い発表となった。	A			与えられた仕事はこなすが、受け入れ農家に対して質問をしていなかったり、写真撮影やデータ収集が十分でない学生が少なからず存在したので、事前指導を充実させ、「インタビューリスト」や「データ収集の内容と方法」を提示する必要がある。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑤ 特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1 学生のサークル活動や自治会活動を充実させ、活力のある学生生活を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。 農学連スポーツ大会の運営ならびに全種目への参加を通じ、他県の学生と交流を深める。	自治会活動やサークル活動に積極的に参加したと回答した学生は、2年次生は53%、1年次生は32%と総じて低く、前年度同様、協調性や自主性が低いと考えられる。しかし2年次生の昨年同時期(1年次生時)についてみると44%であり、この一年間で自治会・サークル活動へ積極的に参加した学生は増えた。 農大祭では、企画から実施まで、学生が主体的に計画し、一人何役もの役割を果たした。天候の影響で阿波踊りを始め多くのステージイベントが急遽室内開催に変更だったが、その都度臨機応変に対応できていた。学生プロジェクトのパネル展示では、学生自らが展示に工夫を凝らし、保護者、OB、関係機関の職員等から好評を得た。 農学連スポーツ大会では、開催県として事前準備から当日の運営まで各人が積極的に役割をこなし、他県の学生と交流できた。	A	A	農大祭では、学生のプロジェクト研究をパネル展示して紹介していた。農家がすぐ取り組めるような研究をしていた。積極的に研究成果を外部へ発信してほしい。	1年次生の自主性とやる気を高めていくことが課題である。収穫祭、卒業祝賀会は1年次生が主体となって企画・運営するため、役員以外の学生にも役割を与えるようにアドバイスする。 アンケート結果の数値が低い原因として、「自治会行事に参加している」=「自治会活動に参加している」という意識が低いことが考えられる。 改善点として、各教室に自治会活動掲示板を作り、日頃から自治会行事の内容や進行状況を掲示し積極的に周知する等、活動の見える化を図るよう指導する。
	2 学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等)を活性化させ、積極的な参加意識を醸成するとともに学生間の仲間づくりを支援する。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にす	剣山登山では、天候に恵まれ、参加した1年次生全員が全行程を完歩した。学生間の連帯感を高めることができ、大自然のなかで自分を見つめ直すよい機会となったようで、90%以上の満足度・達成感を得ている。 農大祭は各班のリーダーが計画・指揮し、班員は自己の役割を果たしており、当日が近づくにつれ、結束が高まった。直前の準備や後片付けも、全員が協力し迅速に行うことができた。 また、よかった点と反省点を各班で話し合い、次年度に繋げることができた。	A		学生が自ら考え、苦勞することが成長する機会になるため、学生の自主性を尊重する。そのためにイベント内容は、学生の意見を取り入れ、職員は少し冒険する。	

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
⑥ 積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1 定期的に課長会、コース会等を実施し、学生の学習や生活について情報交換をし、教育課題の設定並びに指導の標準化を図る。 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	課長会を月1.5回以上、コース会を月2回程度実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を85%以上にする。	課長会を月平均1.3回、各コース会を月に2回程度開催した。学生の学習状況や生活状況について話し合い、指導方針を共通理解するよう努めた。このような話し合いの機会について、教員の75%が、問題行動等の早期発見や危機の回避、授業改善、学校運営改善等につながっていると評価している。 高等学校との連絡・連携は、前年度以上に活発になってきている。	B	B		学生の学習状況や生活態度に関して、個々の教員が知り得た情報（特に危機につながるおそれのあるもの）は遅滞なく組織全体で共有すべきである。 今後も、学生理解に関する情報交換を積極的に行っていかなければならない。また、高等学校との連携は、更に深めていく必要がある。
	2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	学校の組織化と職員の協働意欲の高揚を図るため、課長会において、コースや校務の取組やその課題について共有する場を設定し、体制の維持・発展を図る。 また、指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施する。更に、外部評価も行うこととする。	「課長会において積極的な情報発信に努め、教育活動や学校運営上の諸課題の解決に取り組んだ。」と回答した教員は85.7%と前年度よりやや上回り、職員の協働意欲は前年よりも増していると思われる。 学校評価の計画や運用、並びに学校改善をめざした本校の様々な取組は、全国的にも評価されており、県外の農業大学校からは、問い合わせや視察に訪れるところもある。	B			教育活動や学校運営の課題の解決に向けて、より多くの教職員が知恵を出し合うことが必要だと考える。 教職員が積極的に意見やアイデアを進言できる雰囲気づくりは、着実に定着しつつあるが、カリキュラム的に会議を開催する時間確保が最大のネックとなっており、今後の課題である。
	3 課長会において、最新の教育事情、学生指導、危機管理、コンプライアンス等に関する研修を継続的に実施し、教職員の資質向上を図る。	課長会ごとに、教育指導改善や学校運営改善につながる研修(勉強会)を継続実施(年8回以上)する。	課長会において、学生指導、授業改善、危機管理(メールの個人アドレス一斉送信)、コンプライアンス等のタイムリーな事例を踏まえた研修を5回開催し、教職員の資質向上に努めた。	B			課長会において、その時々の緊急性のあるテーマを捉えた研修は、教職員の資質の向上のみならず、連帯意識の醸成にも役立っており、継続実施が大切である。

平成27年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校 学校評価総括表

「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標②</p> <p>地域農業への寄与</p> <p>農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>		<p>総合評価 B</p>	<p>(所見) 生産技術コースコースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題とし、年間を通して多種多様な野菜・花き・果樹等を扱うことにより、学生の栽培管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト11課題のうち10課題において、地域農業の諸課題を検証・改善し、11人中2名の学生が就農する。</p> <p>地域資源活用コースでは、「多様な地域資源を活用できる人材の育成」に取り組み、先進企業・農家、卸売市場の視察等、県内外での研修を充実させ、地域資源の加工や販売について学んだ。プロジェクト学習で、中山間地域の資源である山菜「タラの芽」に取り組みなど地域資源の活用に関する意識の高まりが認められた。</p> <p>アグリビジネスコースでは、「地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成」をテーマとし、プロジェクト学習では、ミシマサイコ噴霧耕システムの開発やキクイモの加工法等、9課題中5課題で、新規ビジネスモデルの要素を取り入れた研究がなされた。次年度はビジネススキルの獲得と6次産業化をさらに意識した取り組みが必要である。</p> <p>今年度は、農業青年と農業科高校生及び本校農大生が集い、プロジェクト発表や意見発表及び意見交換などを行い、関係機関と連携し学び合う機会を持つことができた。学校からの情報発信に関しては、「学校HP」、「そらそうじゃHP」、「そらそうじゃFacebook」、「Go!Go!農大」などにより継続的な情報発信に努めている。</p> <p>以上の観点から、「地域農業への寄与」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>				
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成 (生産技術コース)	1 栽培・飼養管理について役割分担し、毎日栽培・飼養管理を実践させ、年間を通じた体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。	学生の自己評価において、栽培・飼養に関する技術や態度について評価し、それらの到達度を80%以上にする。	学生ごとに希望に沿った分野に分け、指導を続けた結果、「自己の役割と責任を果たした」と回答した学生は1年次生が66.7%、2年次生は90.0%であった。	B	B	少量でも多品目を栽培することが大事である。 骨の折れる作業にあたり忍耐力を育てたいという方針は、農業人を育てる基礎であり、大いに賛同する。	栽培への興味・関心・意欲を高められるよう、指導手法の改善と指導助言体制の強化及びに努める。
	2 「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品等の機能性や調理方法、花苗の栽培方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	学生による自己評価のみでなく、消費者に対し学生の商品知識や販売方法等に関するアンケート調査を実施し、客観的な評価を導入する。それらの到達度を80%以上にする。	学生が自分達の商品である農産物や加工品について、消費者に機能性や調理方法を情報発信するとともに、アンケートを行った。消費者は興味がある商品に対する評価はもちろん、対面販売への意見も回答してくれた。	B			
	3 地域や消費者の需用・用途に応じた「生産・販売計画」を作成させ、地域の特色を活かした作目の高度・専門的な栽培・飼養技術を実践する。	3以上のプロジェクト課題を実証する。	学生プロジェクトの課題の大半が、野菜・果樹・花き・畜産分野における各作目で、地域の特色を踏まえた高度・専門的な問題を検証し改善するものであった。	A			
							次年度も引き続き、地域に貢献できるプロジェクト課題に取り組んでいきたい。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
② 多様な地域資源を活用できる人材の育成 (地域資源活用コース)	1 地域資源を活用した先進事例や地元の地域資源に関する情報提供を積極的にを行い、プロジェクト活動への取り組みに活かす。	教員から情報提供を行うと共に学生の発表機会を年間4回以上持つ。	コース演習の時間を活用し、ほ場で生産する作物や加工、市場販売等の知識について情報提供に努めた。 本年度は、タラノメ、夏秋ナス、サトイモ、筍、阿波番茶、阿波すず香等を教材として取り上げ、商品開発、販売方法等について試みた。	B	B	ブランド品目を継続していける後継者を育成してほしい。	今後とも、実習やコース演習等を通じて、徳島の地域資源に関する情報提供に努めると共に、それらを学生のプロジェクト研究へと繋げていく。
	2 市場や大手量販店での流通販売に関する研修や産地視察研修を実施し、現場のリアルな情報をプロジェクト活動に活かす。	先進地での校外研修を年間2回以上実施し、学生の自己評価において、当該活用技術の理解度を80%以上にする。	本年度は、和歌山の有田で柑橘を用いた六次産業化を視察し、大阪市中央卸売市場で青果販売の実際を体感、神戸市では最新鋭の食品工場を視察・調査した。 プロジェクト学習の一例として「タラノメ」の栽培技術について、学生とともに先進農家に聞き取り調査を数回行い、プロジェクト学習に活かし、結果を農家へフィードバックした。 地域資源の活用技術の習得に対する学生の肯定的評価は、2年次生が73%、1年次生が57%であった。	B			今後とも、地元にあるのにその価値に気づいていないような地域資源を始め、有望な資源に着目し、栽培や加工等の試作を通じ、その活用方法や商品化を模索する。 また、市場・市場外流通、産地での直接販売など複雑化する流通の実態や高度化する6次産業化の事例を学ぶため、関係者と連携を深め、校外視察や研修を充実させていく。
	3 商品開発を継続してきた「スタヂ」について、商品化を行う。 また、新かんきつ類の「阿波すず香」の活用方法を検討する。	「スタヂ」を用いた商品1品の販売を行う。 「阿波すず香」の活用方法を3種類以上検討する。	昨年度までにコースで技術確立した「スタヂジャム」は農学演習(加工・利用)の授業を通じて、取組の経過や加工方法を説明することとなった。 「阿波すず香」については、食品加工学、利用・加工の授業や農大祭・収穫祭を通じて、マーマレード、豆腐、シフォンケーキ、ボン酢などの活用方法を検討するとともに、展示を行った。	C			六次化が単年度になる。農大のものを周年販売する商品があれば良いのではないか。
③ 地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成 (アグリビジネスコース)	1 学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析させ、商品開発や販売戦略等に活かす。	市場ニーズの把握に取り組んだ学生プロジェクトを50%以上とする。	1年次生の71.4%が肯定的回答をしている。プロジェクト研究が始まっていない段階での実践販売への参加であり、参加すること自体で市場ニーズを把握につながることから肯定的意見が高かったと見られる。2年次生の55.6%が肯定的回答をしている。2年次生は、自分のプロジェクト研究に市場ニーズ調査結果を反映させて初めて市場ニーズの把握と考えられるので、50%をわずかに上回るにとどまったと考えられる。	A	B	栽培があつての経営であり、六次化であろう。	1年次生に対しては、実践販売に参加するにあたり、市場ニーズの把握を参加目的の1つとして確実に認識させるよう留意する必要がある。2年次生に対しては、プロジェクト研究に対する市場ニーズ調査等を複数回は必ず実施するよう指導することが肝要である。
	2 コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。	「『プロジェクトマネジメント』、『ブレインストーミング』等の各種の手法を、最低1つは習得できた。」と回答した学生は、2年次生は66.7%、1年次生は42.9%であり、いずれも80%を下回った。	C			販売実習等の前後などで、実際に左記の各種手法を、アグリビジネスコースの学生全員で実施する機会を設けることが必要である。
	3 学生のプロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	「6次産業化」を視野に入れたプロジェクト研究に取り組んだ学生を50%以上とする。	「卒業研究において『6次産業化』を視野に入れた取り組み」を2年次生は44.4%実施したと回答し、1年次生は71.4%が実施しようとしていたと回答した。2年次生は50%を下回り、1年次生は50%を上回った。	B			六次化は、一次産業の人だけでは難しいことから、食品工業と連携してはどうか。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
④ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生活動に係る積極的な情報発信	1 平成24年度より導入した加工関連講座を充実させ、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、新商品を2品以上開発・提案する。	加工関連講座や6次産業化プロジェクト等を推進した結果、いちごジャムを製造販売できた。 また、県育成の香酸カンキツ新品種「阿波すず香」について、スムーズな生産拡大の一助とするため、加工品の試作を行った。 そのほか、摘果メロンを利用したジャム作りにも取り組んだが、試作段階にとどまった。	C	B	T P P大筋合意を受け、ハラール認証、H A C C Pによる工程管理など海外を視野に入れたことも考えなければならぬ。	今後も地域や学校、企業と連携した新商品開発にむけた取組を推進する必要がある。
	2 学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大ホームページその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して公開する。 ホームページを2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。	「GO!GO!農大!2015」を12部発行し、学校行事や学生の活動状況を外部に発信した。「農大HP」、「そらそうじゃHP」、「そらそうじゃfacebook」も定期的に更新されており、最新のトピックスを遅延なく配信できている。これらを閲覧したことのある2年次生は76%であった。	B			「農大HP」、「そらそうじゃHP」、「そらそうじゃfacebook」の閲覧に関して、2年次生は高いポイントを示しているものの、1年次生は45%と低いことから、入学当初から、これらの広報を閲覧し、広報の機能や効果を知り、また、自分たちの学校生活のモチベーションアップにつながるよう指導する必要がある。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。 また、義務教育や高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。	学生募集に関わる高校訪問を2回行った。多くの在校生を抱える農業高校には3回以上訪問し、情報交換を行った。高校での模擬授業や進路ガイダンスには13回参加(3月末では16回見込み)した。	A			小中高において、体験的な活動を重視したキャリア教育や職業教育の導入が検討されていることに鑑み、将来の農業の後継者育成のために、積極的に小中高と連携をしていく必要がある。